

# アカメが斬る！ 抜刀 必殺の帝具使い

biwanoshin

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

これは、とある少年と生物型帝具の物語。

その帝具の名は、『抜刀必殺』。

抜けば必ず一つの命を奪うその帝具。

大きな力の対価に呪いを発生するその帝具。

彼らの描く物語は、いかなる形になるのか。どうぞ、お楽しみあれ。

『暁』にてマルチ投稿させていただいています。

# 目次

第六話	46
第五話	33
第四話	26
第三話	19
第二話	11
第一話	1



# 第一話

「さて、と・・・標的はあれで全部かな？」

『大物は彼女が向かいましたので、マスターが相手をするのはあれで全てです』

その返事を聞いてから、俺は腰に吊るしている剣に触れる。

そのまま背中への剣もあることを確認し、そいつらの前に姿を出す。

そしてそのまま、最初に俺に気付いたやつらの首を、腰の剣で落とす。

「・・・問題ないか？」

『はい、問題ありません。今ので十分です』

「OK。このまま続ける」

流石にこれ以上の不意打ちは無理なので、剣を構えてその集団に向き直る。

腕つぶしがたつのは・・・四、五人、つてとこか。

「お前、何を」

「邪魔」

とりあえず一番近かったやつに向けて跳びながら斬り、すぐそばにいた実力があつてうなやつにも向かうが、そっちは失敗。

しかし、防がれたとは言え武器を一時的に封じた。これ以上の隙はない。背中の剣を抜いて腕に突き刺し、緩んだところで首を切る。

そのまま勢いで斬り、斬り……

「……任務終了」

『勿論、納刀も問題ありません』

お墨付きをいただいたので、剣を払って血を飛ばしてから納める。血を落とす必要はないとは言え、気分的になんだか嫌なのだから仕方ない。これまでそうしてきた癖なだろう。

「さて、と。向こうはどうなってるかな……」

『彼女が失敗することはないかと。とは言え、これ以上時間がかかるようでしたら様子を見に行くことを推奨します』

「いやいや、その必要はないよ」

と、相棒と話をしているともう一人の仲間が合流してきた。

「お疲れさま。何か問題はあった？」

「ううん、特になにも。任務は無事に成功したよ」

まあ、ガイアファンデーションほど暗殺向きな帝具も中々ないし、そうそう失敗はないだろうけど。

「そつちは？ダインスレイブはリスク大きいし．．．納刀できてるなら大丈夫かな？」  
「ま、これだけ敵がいたしな。そうそうないぞ、条件を満たさないことは。一応、報告にあつた人数分は全部殺した。逃げた様子もない」

「じゃ、これで任務終了だね。アジトに帰ろ♪」

そう言つてチエルシーが歩き出したので、俺もその後を追う。

今回はそこそこに遠出したし、ボスからも帰りはのんびりしてきていいと言われた。ゆつくり気ままに帰るとしよう。

二人とも、何か楽しめるところがあるだろうし。

|| || || || || || || ||

「うそ．．．だろ．．．」

任務を終えてアジトへ帰つてくると、そこにはもうアジトはなかった。

チエルシーやスレイブと街で情報を集めてから帰つたから、その間に何かあつたのか．．．？

「．．．カズキ、あつち」

『革命軍本部の人間がいます』

二人に言われてみる先には、確かに革命軍の本部で見た記憶のある人間がいた。

何かを探しているような感じだけど・・・生き残りを探しているのだろうか？

・・・なんにしても、このまま見てる、ってわけにはいかないか。

すぐ隣にいるチエルシーにその意図を伝えてから、念のために背中 of 剣を確認して近づく。

「何をしてるんだ？・・・ってか、何があつたんだ？」

「ああ・・・カズキさん。いえ、急にこのチームと連絡が取れなくなったので調査に來ていました。お二人はたしか、任務に行っていたのでしたか？」

「うん、そだね。で？ここはいつ襲撃されたの？」

「そうですね・・・残っていた食事の傷み具合などから考えて、お二人が任務に向かった次の日くらいではないかと」

つまり、俺達が仕事先に向かっている最中。その間にはもう、皆は・・・  
「・・・何かやってきた相手の証拠とかは？」

「ありませんね。お二人の帝具で調べるのは・・・無理ですよね」

「うん。私のガイアファンデーションも、カズキのダインスレイブもそう言ったことは向いてないよ」

と、俺が考え事をしている間にチエルシーは話を進めていた。



せめてやったやつらさえ分かれば、この手で殺しに行くのに……

『落ち着いてください、マスター。感情的になって向かえば、返り討ちにあう可能性が高くなります』

「……悪い、そうだな。……そう言う稼業、だもんな」

頭が冷えてきたところで、俺はこれからどうするのかを考える。つつても、特に選択肢はないよな。

「とりあえず、俺達は一旦本部にいればいいのか？」

「はい。まずは本部にいてもらって、何か割り当てる場所があればそこに配属させていただきます」

まあ、色々と人手不足ではあるし、聞いた話では俺達のところとは別の地方チーム……ナイトレイドのほうで死亡者が出たらしいし。どこかしら行くあてはあるだろう。

そんなことを考えながら二振りの剣に手を添えて心を落ち着け、集合した本部の人たちの後ろをチェルシーと並んでついていく。

「正直に言いますと、全滅も覚悟していたので二人のこつていた事は行幸でした」

「……俺達としては、その場にいたかつただけだな」

もしもその場にいれば、守れたかもしれない。全員を守り切れなかったとしても、後一人は、後二人は……考え出したらきりが無いが、それでも考えてしまう。

そんな後悔を抱きながら、本部へと向かうためにエアマンタに乗り込む。

・・・俺、高いところは苦手ではないはずだけど、空を飛ぶレベルだどうなんだろう・・・

|||||

革命軍本部で割り当てられたテントの中、簡単に布団を敷いてその上に仰向けに寝転がる。枕元にはスレイブもいるが、まあいつもの事なので気にしない。

ついでにチエルシーもいるのだが、まだ寝るような時間でもないしよくあることだから気にしないでいか。

本部に来てから数日がたつが、何をしたらいいのか分からずにぼけーつとしている事ばかりだ。

と、そのままもしない時間が過ぎていくと、ふいにテントの外から俺達を呼ぶ声がした。

「はいはい。ちょっと待つててくださいいねー」

そう言いながらテントの入口をあけて外を見ると・・・そこには、右目に眼帯をして、右腕が義手の男性・・・いや、女性がいた。

体つきからして女性で間違いないはずだ。うん。

「えつと・・・どちらさん？」

「そうだな。話をする前にあげてもらってもいいか？」

「あー・・・何もないけど、それでもよければ」

「構わないさ、茶はこつちで準備してある。スサノオ」

「ああ」

そう言いながらその女性は後ろに控えていたらしいやつと一緒に入ってくる。

テントの中に五人、か・・・まあ、広めのテントだから大丈夫か。

「・・・って、そいつ・・・」

「うん、本部に保管してあった生物型の帝具。電光石火・スサノオだね。眠りっぱなしだつて聞いてたんだけど？」

口にくわえているアメの棒をピコピコさせながらチエルシーが聞くと、女性は頷いた。

「そうなんだが、私に反応して動きだしたんだ。生物型で負担が少ないから、今の私でも使える、という事で借りることにした」

「なるほどなるほど」

義手からしても、あまり負担をかけることはできないのだろう。とはいえ、生物型だ

から負担が少なくなる、つてのも正しくはないんだよなあ……

「それで？あなたは革命軍ではどんな立場のなんて人？」

「ああ、悪い悪い。まだ自己紹介もしていなかったな」

笑いながらチエルシーにそういったその人はスサノオが淹れたお茶を一口飲んでから、

「私はナイトレイドのボスをやってるナジエンダだ」

ようやく、自分の名前を名乗った。

なるほどなるほど、ナイトレイドの……つてことは、本部に来た目的は絞られるな。回収した帝具の搬送か、減った分の人数補充か。んでもって、ここに来たつてことは……

「まあなんにしても、久しぶりナジエンダさん。こっちはよく一緒に仕事をしてる」

「カズキだ。こいつは相棒のスレイブ」

「スレイブだ」

まあ、うん。

スレイブはいつも通りにそっけない返事をする。が、ナジエンダはそれに対して特に思うところはないらしく、

「さて、本題に入ってもいいか？」

「勧誘の話なら、どうぞぞ?」

「話が早くて助かるな」

そう言ったナジエンダは、次の瞬間には真剣な表情になり、

「カズキの言った通りなんだが、三人とも、ナイトレイドに来ないか?」

予想通りの言葉を発した。

俺はチエルシーとアイコンタクトをとり、俺の方から聞くという事で決定してから再びナジエンダの方に向き直る。

「判断基準は?」

「帝都ではこれから、帝具使いだけの特殊警察を組織するという。帝具使いに対抗できるのは帝具使いだけである以上、手の空いている帝具使いを誘うのは普通の事だろう?」

帝具使いだけの特殊警察、か・・・かなり壮絶な殺し合いになりそうだな。

「何で俺達が帝具使いだと?」

「聞いたただだよ。まず無理だろうという前提で聞いてみたら、このテントに手が空いている帝具使いがいると言われてな。まさか、三人もいるとは思わなかったが」

「二人だよ。・・・ちなみに、その特殊警察つてのは誰が率いるんだ?」

人数のところでナジエンダが疑問を表情に浮かべたが、今説明するのは面倒なので先

に質問をする。

「ああ・・・エスデスだ」

その瞬間、チエルシーが息をのんだのが分かった。俺としても、驚きを隠せない。つてか、厄介にもほどがあるだろ・・・

「そう言うわけで、私たちとしては即戦力になる者が欲しい。頼めるか？」

「・・・まあ、このまま暇を持て余しているのはなんだか申し訳ないしな。二人はどうする？」

「そだね・・・カズキが行くなら私も行こうかな。せつかくお互いに残ったんだし。スレイブちゃんはどうする？」

「聞くまでもないだろう、チエルシー。私は剣。主のいるところが私のいるところだ」

「んじゃ、決まりだな。よろしく頼む、ナジエンダ」

ナジエンダにそう伝えると、一つ大きくうなずいて、

「ああ。三人とも、ようこそナイトレイドへ」

こうして、俺達三人のナイトレイドいりが決定した。

「そう言えば、帝具使いは誰なんだ？」

「ああ・・・俺とチエルシーだよ」

## 第二話

「・・・なるほど、これがナイトレイドか」

エアマンタに乗ってナイトレイドのアジトまで来てみるとそこでは戦闘が行われていたのだが・・・中々に圧倒的であった。

さすがは、全員が帝具使いなことにはある。

「とはいえ・・・ほら、何かヤバそうだよ？」

『四名ほど、立てないようですね。鎧型の帝具を使っている者は問題ないようですが』  
「ふうん・・・毒とかその類かな？それなら周りのやつらが何ともないことにも説明がつく」

とはいえ、このまま傍観しているわけにもいかない。

「どうするんだ、ナジエンダ？俺が行くか？」

「そうだな・・・いや、カズキはひとまず残ってくれ。行けるな、スサノオ？」

「ああ」

スサノオはそう短く返事をすると、エアマンタから飛び降りて・・・その勢いで一人押しつぶした。

「今私やチエルシー、カズキが降りるとヤバそうだな。まずはここから指示を出す」  
「了解」

「……………」

チエルシーは敬礼しながらそう返事をしたが、俺はなんとなく釈然としない気持ちで周りを見回す。毒を使ってるんだよな……

「さあつ、敵を駆逐しろ!!スサノオ!!」

「分かった」

ナジエンダからの指示に対して再び感情を感じさせない声で返事をしたスサノオは、武器から回転する刃を出して一気に敵を殺していく。

うわあ、圧倒的……

しかし、相手もそれを見て行動をとった。倒れていた敵たちが一斉に爆発したのだ。……まあ、スサノオは生物型の帝具だからあれくらいなんともないだろうけど。「にしても、タイミングを見て爆発させられるってことは……どこかから見てるのか……？」

毒、つてことは万が一にも自分に被害がないように風上に行くはずだから……

「……………見つけた。あつてるか、スレイブ？」

『おそらく。少なくとも、ここを見られている時点でそのまま帰すわけにはいきません』



「だよな・・・ナジエンダ」

俺はナジエンダを呼びながら俺の帝具、ダンスレイブを抜く。

「どうした？」

「怪しいやつらを見つけた。ちよつと行ってくる」

「は・・・？つて、おい!!」

俺の帝具の代償を知っているナジエンダは俺を止めるが、もう遅い。

この帝具を抜いてしまった以上・・・もう、だれにも止められない。

「スレイブ、奥の手。同化！」

『イエス、マイマスター』

返事をしながらスレイブはその切っ先を俺に向けて進み・・・俺の中に入る。その力が体中に回ったことを感じると同時に俺は飛びだし・・・そんな俺の姿を認識したのか逃げ出そうとしていた四人組の前に着地する。

「その見た目、少なくともただの人間ではないな。今回のこともお前たちがやったのか？」

俺の問いに対して返事はない。しかし・・・

「ご安心くださいスタイリッシュ様！」

「我らは将棋で言えば金や銀！必ずお守りします！」

目がでかい男と鼻がでかい男の一言で、まあ間違いないだろうと確信する。

そうでなくとも、スタイリツシユと言うのは帝具。パーフェクターの使い手だろうか、殺すんだけど。こいつは奴隷商人たちにも薬を回していて、そのせいで苦しんでいる人たちがいる。

つまり、こいつは俺の知り合いの仇とも言えるからな……ここで殺す。

「こうなつたらもう……腹をくくってえ！」

と、そんなことを考えていたらスタイリツシユは液体の入っている注射器を取り出していた。……下手に動くのは危険、かもしれないな。

「切り札その2危険種イッパツ!!これしかないよね!!」

そして、スタイリツシユは自分自身にそれを注射し……一気に膨れ上がった。

えっ……

「きたきたきたあああ!これぞ究極のスタイリツシユ!!」

え、え……

「私自らが危険種となることでええええ!!お前達全員を吹き飛ばす!!」

「おお、美しい……!」

「さすがはスタイリツシユ様……!」

いやいやいや、あれはない。普通にキモい。肉だるまじやん、あれ。

とかそんなことを考えていたらスタイリッシュが目男と鼻男を掴みあげ・・・  
「貴方達は私の貴重な栄養よ！一つになりましょおおお！」

胸の部分に現れた口で、二人を食った。それに伴ってその体は大きくなり、良く分からない装備も追加される。

「女なんて本当は食べたくないんだけど・・・仕方ないわね！」

と、そこでスタイリッシュは残りの一人・・・耳のでかいやつに対しても手を伸ばしたので・・・とりあえず、その腕を斬り落とす。

「えっ・・・」

「あー、その耳女。逃げようとか考えるなよ」

後ろで驚いたような声をあげているが、無視してスタイリッシュの方を視る。

腕を斬り落とされた際には悲鳴を上げたが、今はどうにか流れる血を止めようとしている。『自らが危険種となる』とか言ってたし、血を止める手段か傷口をふさぐ効果があったのかもしれないが・・・

「血が止まらないですって!?!」

「悪いな、俺の帝具で斬られた傷は俺の帝具が無事である限り治らない」

大きな代償の代わりにもものすごい力を持つのが俺の帝具だ。これくらいの効果はもうデフォルトで存在している。

「さて、二人食った程度ならちよつとでかいくらいで収まるし、斬れないほどでもないみたいだな……このまま、ここで死ぬ」

俺は左右の手で手刀を形作つて構え、スタイリツシユを真正面から睨みつける。そして……

「死ぬのは貴方よ、帝具使い！」

片腕だけでありながらこちらに向かつてきたところに突き出し、その腕を割く。

スタイリツシユは腕を引きもどそうとしたが逆に俺が走り、腕の根元まで来たところで振り降ろし、切断。

「この……まだまだよっ！」

「いや、もう終わりだ」

どこからか生えてこちらに向かつてきた注射器の様な触手を全て切り落として、足刀を蹴りあげてその体に股から頭まで一筋の線を走らせる。

「なっ……」

「お前のせいで、俺の仲間がたくさん死んだ」

傷は浅かったようでも後ろに飛んでよけられたが、俺はそれを追撃する。

「……………ま……」

もう避けられないという事を悟つたのか、スタイリツシユは何かを呟く。

「・・・まだ色んな人体実験・・・したかったのに・・・」

そして、今の発言を聞いた俺は容赦なくその胴体を二つに切り分ける。

「な・・・何故、アタシがこんなつ・・・不幸な、目に・・・」

そして、その胴体が地面に落ちるのと同時に、スタイリツシユは何も言わなくなった。おそらく、もう死んだのだろう。まず間違いなく聞こえていないのは分かっているが・・・

「・・・奴隷なんていう人生を押し付けられた子たちがいた。それだけでも辛いのに、お前が作った薬のせいではそれ以上の苦しみを味わったんだ」

スレイブの同化を解き、それを納刀しながらその死体に背を向ける。

「お前が不幸を味わうには、十分な理由だろう」

チン、と音を立ててダインスレイブが鞆に収まったのを確認して・・・スタイリツシユが確実に死んだことを確認してから、さっきの耳女のところまで歩く。恐怖で腰が抜けているのか、そこから全く動いていなかった。

「さて、お前をどうするか何だが・・・どうする?」

「どうする、と言うと・・・?」

「いや・・・自分が喰われそうになつていたわけなんだが、それでもまだ帝国につくか?」  
見た目からしてこいつは間違いなくスタイリツシユの強化兵だろう。それも、聴覚強

化の。だとしたら索敵に使える。

「・・・いや、そっちに・・・貴方に従わせてもらいます。元々、あの人は女に興味がなかった関係で待遇が悪かったし、渋々でしたし」

「そう。なら、一緒に来い」

何でもない場面なら裏切りを警戒する必要があるが、今回はそうではない。明らかに自分が害をこうむりそうに・・・それも、喰われそうになつたんだ。

そういう場面で誘われたやつと言うのは、乗ってきたならまず裏切ることはない。完全に警戒を解くのはまだ無理だろうが、ある程度は信用できる。

そんなことを考えながら上を見上げ、自分が何を見たのか理解できないとでもいうようなナジエンダの表情に満足しつつ、手を振ってくるチエルシーに手を振り返した。にしても・・・帝国で殺したかったやつの第一位がもう殺せちゃつただけだ。

## 第三話

「うおーっ、すっげー!! 気持ちいいーっ!!」

「アハハ」

エアマンタに乗って一時的な潜伏場所とする予定のマージ高地に向かっていると、タツミがそう叫びながら笑っていた。その隣ではチェルシーがそんなタツミの様子に笑っている。

「殺し屋とは思えない無垢さだね、タツミ。面白いやつ」

「確かに、な・・・で、大丈夫か、テリングガ？」

「うう・・・耳が・・・キーンって・・・」

さつきから隣でその大きな耳を押さえている少女は、どうやら俺に返事も出来ないレベルでまいつているようだ。

ちなみに呼び方なんだが、耳でいいと言われたもののせつかく仲間になったのに耳と呼ぶのはどうか思ったため、あだ名をつけさせてもらった。意味的には全然変わってないんだけど。

「大丈夫じゃなさそうだな。スレイブは・・・」

「・・・大丈夫、です。ええ、大丈夫ですとも。落ちたところで何ともありませんし」  
「うん、大丈夫じゃなさそうだな」

「マスター、私の言う事は聞いていましたか？大丈夫ですと・・・」

「はいはい。大丈夫大丈夫、俺もいるから」

頭をなでてやると、まだ少し不満そうではある物の黙つてはくれた。頬を膨らませて  
いる姿は可愛らしい。

「いやでも、思ったよりコレ楽しいなーっ」

「良いー！」

「良くないわよっ！」

そんなマインの叫び声は、空へと消えていった。

|| || || || || || || || || ||

「これは・・・確かに“秘境”だな」

「・・・聞こえてくる危険種の声も、中々レベルの高いものばかり。・・・人が住む所じゃない・・・」



テリングはそんなことを言いながら呆れていたが、まあこのメンバーならどうにでもなるだろ。

「新しいアジトに使える場所は、今革命軍の偵察隊が帝都周辺で探してくれている。それまで私たちはここでレベルアップだな」

そして、危険種のレベルが高ければそれだけ戦闘訓練の実験台は増える。俺は帝具を使つての修行はできないのだが、剣を使った戦闘、なら出来るし。

そんなことを考えているうちにも、エアマンタは回収したパーフェクターを乗せたまま飛んでいった。

「あ．．．あれ？行っちゃったけどいいの？回収した帝具持たせたままよ」

「空を飛べる乗り物は貴重だから、俺達のところにずっと残してもいいことはないんだよ」

「巢は革命軍本部にあるから、そこに戻ったんでしょ。自動的に荷物も革命軍の本部に届けてくれるし」

「マインの質問に少しの間とはいえ革命軍の本部で過ごしていた俺とチエルシーが答える。」

テリングに適應すればこのままナイトレイドで使うという手段もあつたのかもしれないが、そもそもテリングが帝都の．．．それもつい先日殺したスタイリッシュの手下

であったという事からしばらくの間は武器を持たせない方がいいだろうという結論に至ったことや、あれの力を十全に生かせるだけの材料をこちらでは手に入れられない事、そしてそもそも適応しなかったことなどから本部に送ることになった。

「それにしても……」

と、そこでチエルシーがいたずらでもするかのような、ニヤリ、と言う感じの笑みを浮かべ、

「マインってそんなことも知らないんだね。アハハ」

そう、笑いをぶつけた。歯を食いしばって握りこぶしを作っているし、今にも怒りそうな感じなんだが……

「さて、改めて新規メンバーを紹介だ。まずは……アレ？」

「ああ……チエルシーならあっち」

気づいたらさつきまでの場所にいないチエルシーをナジエンダが探していたので、チエルシーのいる方を指さす。そこでは、チエルシーがアカメの髪をいじっていた。

「アカメちゃんって近くで見ると本当に可愛いんだあ」

「……なんだいきなり」

「……はあ」

つい呆れてため息をついてしまった。が、自由に行動をとることについては俺も何も

言えないので黙っておく。

「私はチェルシー。同じ殺し屋同士仲良くしましょ。．．．はい、これあげる」

アカメに対して自己紹介をした後にガイアファンデーションから取り出した飴をアカメに渡した。

いや、さすがにそんなのじゃ．．．

「．．．．．歓迎するぞ」

いいのなあ．．．

「ああっ！アカメが餌付けされた!!」

「きつと長旅でお腹がすいてたんだ!!」

「．．．食いしん坊キヤラなのか、彼女は？」

つい気になってあの様子を見てリアクションをあげた二人に尋ねた。

「ああ．．．まあ、そうだな。アカメちゃんはそんな感じだ。それで．．．」

「ん？．．．ああ、そうか。俺はカズキ。これからはナイトレイドとして一緒に行動することになるから、よろしく」

とりあえず二人と握手をして、後ろの二人を前に出す。

「で、こいつらが．．．」

「マスターの．．．そうだな。普段はメイドの様な事をしているスレイブだ。一応、戦う

事も出来る。よろしく頼む」

「メイドさんだと!?・・・確かに、言われてみれば服装は・・・!」

なんか、ラバックが興奮し始めた。

「ちくしょう!美少女のメイドさんが専属で、だど!?羨ましいぞこの野郎!」

「落ちつけ・・・」

頭を抱えなくなってきた・・・なんだこいつ・・・

「あー・・・ウチはまだ警戒されてるっほいけど、いずれよろしく」

「あ、ああ・・・よろしく」

テリンガについてはまだ微妙な感じであるが、いずれどうにかなると信じよう。

「えっと、一応聞いておくけど・・・帝国を裏切る形になったことに何か思う事はあるのか?」

「いや、特には・・・冤罪で捕まるし、手術との相性がいいからって『女なんて・・・』とかぶつぶつ言いながら手術されたり、その後もあの人女に興味ないから扱い悪いし・・・」

「ああ、うん、ゴメン・・・あの人もんな、うん・・・裏切ることはねえな」

なんか、さっそくタツミはどうにかなったっぽい。

「そしてこつちが革命軍本部から譲り受けてきた私の新しい帝具。電光石火・スサノオ

だ」

「……………」

「自動で動く生物型だから負担が少ない……今の私でも使えるわけだ」

まあ、スサノオみたいな生物型なら負担は減るよな。

「あ、改めてよろしく」

タツミはそう言いながら握手をしようと手を伸ばすが……その瞬間、スサノオは電光石火の名にふさわしい速度で動き、タツミの服の乱れを直した。

「……………よしっ……!!」

「いや、よしって……」

「同じ生物型ではあるが、だいぶ趣が違うな……」

テリンガとスレイブはそんなスサノオの様子にどうリアクションしたものと悩んでいたが、

「あ……まあ、帝具に関わる人間が一癖も二癖もあるやつばかりなんだ。なら、帝具自身があんな感じでもおかしくはないだろ」

「ウチの中の帝具への認識が音を立てて崩れていく……」

ちなみに、この後スサノオがものすごい手際で家事をこなし、ナジエンダによって戦闘とは関係のない部分の自慢をされ、テリンガは完全に頭を抱えた。

## 第四話

「二時、三時、六時、九字の方向！」

「二、三はスレイブ！他二つは俺が対処する！」

「了解」

と、テリングアの指示があつた方向を見ると・・・確かにその方向からイノシシの様な危険種がこちらに向けて突進してくる。

とりあえず、せっかくの機会であるのでこうして特訓をすることにした。スレイブも剣の状態で鞘から抜くか奥の手を使うかしない限りは代償を必要としないので参加している。

方針としてはこうだ。

テリングアには戦闘能力が皆無なので戦わず、その代わりに特化している耳で周りの状況を認識。逐一それを俺達に報告して状況に合わせて対応できるものがそれに対応する形だ。

最初は慣れるまでは急に対応するのは難しいだろうと思っていたのだが、テリングアの能力を侮っていた。テリングアは、本当に周りの情報を完全に認識できている。どこから

くる、と言うのを言われてからそいつが実際に来るまでに、直進ならかなりの速度を持つイノシシ<sup>イ</sup>もどき<sup>ツ</sup>ですら十秒弱かかるのだ。対応するのはかなり楽。一緒に行動していれば不意打ちなんかを受ける心配もなくなるだろう。

「次、零時の方向……む、群れで一氣にきます……」

「ゲ……」

と、目を閉じて耳を澄ましていたテリングガも含めた三人がこれを零時にすると定めていた巨木の方向を見ると……それを先頭の者がへし折り、その後ろに続くように次から次へと走ってくる。

信じたくない。しかし、目の前で起こっている以上は信じるしか……！

「まずつ……テリングガは俺とスレイブの後ろに隠れ、前以外から何かが来たらすぐに報告！俺とスレイブはとりあえずひたすらあれを倒すぞ！」

「りよ、了解！」

この後、俺とスレイブはひたすらテリングガを守れる位置をキープしながら危険種を狩りに狩りに狩りまくり……

「あ、上からも何か……」

「……」

そろそろ、精神的な限界が近づいてきて……

「こうなりややけだコンチクショウー！」

スレイブに投げ飛ばしてもらって上から来たやつを迎え撃って倒し、落下の勢いでイノシシどもを吹き飛ばした。

|||||

「うっわー…カズキにスレイブ、テリングの三人はまたたくさん討伐してきたねー…土竜までいるよ」

「まあ、やりすぎた自覚はあるけど…途中からもうやけくそぎみに来るやつを狩ったし」

「ちようどこのイノシシの通り道に当たったのか、やけに次から次へと来た」

「そして、それを食べようとしたやつも…喉、疲れた…」

とりあえず討伐した危険種をうまいこと縛ってまとめ、ボール状にして転がしてきたんだが…それでも疲れた。

「まあ、テリングがどこから来るか教えてくれるおかげで引き際ははっきりと分かるかな。おかげでギリギリまで狩りを続けられた」

「へえ、テリングがいるとそんなことまで分かるのか…今度から、他の者との連携も



練習しておいてくれ」

「あ、はい」

そして、ここ一カ月の間にテリングはメンバーからの信頼を得ていた。一番の要因はスタイリツシュがああの性格であるため、まず間違いなくあれに対して思うところはないだろう、という本人としてはとても遺憾であろう理由なのだが・・・個人的には良かったと思っている。

「まあなんにしても、この周囲の危険種はスムーズに討伐できるようになったな」

「いろんなタイプのやつがいて攻撃してくるから気が抜けないぜ」

「いいじゃん、その方が面白い」

「つてか、それくらいでないと特訓にもならないしな」

今回のイノシシは真正面から来るタイプだったが、酸を吐くやつとかもいるからな。何が飛び出すか分からない。

正直、体力よりも精神力を削られる。

「で、どうだ二人とも？ ナイトレイドのみんなを一カ月見て」

「んー・・・そだね・・・」

チエルシーは少しばかり悩むようなしぐさを見せてから、

「うん・・・つよいね・・・。その例外を除けば、私が前にいたチームの誰よりも強い

よ」

その言葉にタツミとマインの二人は喜んだような表情をするが、  
「でも……強いからって生き残れるわけじゃない」

次にチエルシーが言った言葉で表情が固まり、

「昔の報告書は読ませてもらったけど……シエーレとブラート。殉職したこの二人……人間としては好感持てるけど、殺し屋としては失格だと思う」

「なっ!」

その次の言葉で、怒りに染まった。

「皆も甘いところをどうにかしないと、これから先いくつ命があっても足りないんじゃない?」

そして、チエルシーはそんな二人を気にもせずになんか言い残し、アジトの中へと入っていく。

はあ、まったく……

「アイツ……どこまでも、ムカツク……」

マインはそんなチエルシーにいらだちを感じたのか、手をきつく握りしめてそうもらす。

「相変わらず、ズバズバ言うヤツだな」

「あー・・・悪いな、皆。変なところで不器用なんだよ、アイツ」

一応そう謝っておいてから・・・

「とはいえ、もう少し甘いところを減らさないといつ死んでもおかしくない、つてのは俺も同意見だ。何かを見捨てたり、諦めたり・・・そう言う力も必要なんだよ、この稼業は」

と、個人的な意見を全員に言ってから、チエルシーの後を追って扉を開き・・・

「・・・つて、お前・・・」

「アハハ・・・ごめんね、カズキ。また私の代わりに謝ってもらっちゃつて」

「いいよ、気にすんな。もう今更だ・・・それに、俺も同意見だったしな」

入ってすぐのところ壁にもたれかかっていたチエルシーの横で俺も壁にもたれかかり、そう話をする。

「・・・もう二度と、あんな思いをしたくない。そうだよな？」

「やつぱり、カズキには分かっちゃうか・・・うん、この連中には、ああなつてほしくない」

俺とチエルシー、スレイブが共通して抱いているであろう思い。

仕事を終えて帰ってきてみたら、チームのメンバーが全滅してたなんてことは。一気にたくさんの仲間を失うなんてことは、もうあつてほしくないし、誰かがそんな目に

会っていいとも思わない。

俺達も殺し屋である以上、誰かをそう言う目に合わせることもなるだろう。そこが裏の仕事同士の対決で起こる虚しさだ。だから、どうせなら仲間内でくらは・・・

「・・・あーあ、ちよつとつらいなあ・・・」

「だな・・・」

そして、その時のことを思い出してしまい、俺達は二人揃って同じつらさを味わっていた。

## 第五話

「カズキ、今回の暗殺はお前に行ってもらおう」

朝食が終わるなり、ナジエンダはそう言ってきた。また急だな．．．いや、あつたら出来る限り回して欲しいって言ったのは俺だけだ。

「えー、カズキだけ？」

「いや、相手の実力は大了たことはないが、人数が人数だからな。一人では難しいだろう」

「とはいえ、比較的大人数を俺が始末することになるだろうけどな」

そう言う俺の帝具についてあまり詳しくないメンバー．．．チエルシーとナジエンダ、スサノオ以外が首をかしげている。まあ、仕方ないかな。

「俺の帝具は抜刀するたびに一つの命を奪わないといけないんだけど、普段は危険種でもないんだ。危険種でもないとなるとダメみたいだけど」

「よく分からない帝具だな。で？そのことと何の関係が？」

ラバックの意見はもつともだけど、本人の前でよく言える．．．って、そういやスレイブが帝具だって知ってるのはまだ一部の人間だけだっけ？

「ただ、あんまり毎回危険種だと納刀できなくなるし、納刀出来ない時間が長いと俺が呪い殺される」

「だから、こうして暗殺を入れてもらったのか・・・」

アカメは納得したような声を出した。呪いを持つ刀を使う者同士通じる物があるのかも知れない。

「それで、相方なんだが・・・チエルシー、は難しいかな」

「そうなんだ？」

「ああ。潜入してどうこう、という余裕がないからな」

つまり、一気に攻め込んで片付けて来い、という事か。分かりやすくいい。

「となると、戦えるやつだからテリングは除外。・・・どうせ全員が初めて組む相手になる、か」

「ああ。だから・・・タツミ、お前が行って来い」

「え、俺？」

「そうだ。どうせなら、一番暗殺初心者なのだからカズキと一緒に行って学んで来い」

こうまでではつきりといわれて何か思うところがあるんじゃないかと思っただ、そうでもないようだ。素直なもんだな、こいつは。

そんなことを考えながら俺とスレイブ、タツミの三人は席を立って出かける準備をし

に向かった。内容の書かれた資料はもう渡されているし、向かう途中で確認すればいいか。

|||||

「ふう・・・特に苦勞もせずにならな」

「まあ、護衛の人たちは強かったけど言うほどでもないし」

カズキがたてた作戦が正面突破だったこともあつてかすぐに終わったので、今俺と一輝、スレイブの三人でアジト(仮)へと向かっているといるところだ。ってか、それにしても：

「まあ、何事もなく終わるのはいいことではないですか。私との契約もあるのでし」

「確かに、スレイブの言うとおりだな。変なことではないに限る」

「なあ・・・一つ聞いてもいいか？」

さすがに聞かないでいられないので、二人に質問をすることにした。

今回の正面突破は、まず俺がインクルシオで透明化した状態で中に入り込んで壁などを破壊して目を引き、次にカズキが正面から突っ込んで出来る限り混乱させる。で、そのまま二人で暗殺対象を・・・って感じだったんだけど・・・

「ん？なんだ？」

「いや・・・スレイブって、何してたんだ？」

そう、スレイブは何もしてないんだ。ボスが指定した今回のメンバーでもないのに行くと時についてきてるし、かと言って攻め込んだ時に一緒に暴れてたわけでもないし・・・

「・・・マスター、まさかまだ私がお話していなかったのですか？」

「えーっと・・・話した、よ？ほら、ナジエンダにスサノオ、テリンガは知ってるし」

「つまり、ほとんどは知らないのですよね？」

「・・・ハイ」

そして、カズキはスレイブに言われてなんだか縮こまっていた。メイドと主なのに立場が・・・

「あーっと、だな。タツミは俺の帝具についてどこまで知ってる？」

「ん？えっと・・・スタイリッシュの時、俺達の前で納刀してたやつだよな？今回も使ってたあの紫色の刀身の両手剣。両手剣型の帝具、抜刀必殺・ダインスレイブだっけ？」

名前についてはボスから聞いてたし、見た目から両手剣型でいいはず。顔を隠すためかそれっぽいマスクを着けてたから騎士っぽかったのが印象的だ。

「それで、抜いた時に一つの命を奪わないと刀が鞘に収まらないから『抜刀必殺』。普段は危険種でもいいんだけど、毎回それだどこかで鞘に収まらなくなつて、最後には呪いで持ち主が死ぬから今回みたいに仕事を入れてもらった・・・で合ってるよな？」



「うん、良く覚ええました。意外と記憶力いいんだな」

「意外とは余計だ！」

「ったく……。」

何にしても、帝具については一通り覚えておくようにボスに言われてるから覚えただ。これで少しは……

「でも、残念。完璧な回答ではないな」

「え!? そんなはずは……」

「事実として違うんだから素直に受け入れろ」

スレイブにはつきりと言われた。容赦なく言ってくるな……

「はあ……じゃあ、どこが違うんだよ?」

「ああ、俺の帝具は両手剣型じゃなくて生物型、帝具人間だ」

「……はあ!?!」

「いやいやいや! だって……」

「あれはどう見ても両手剣型だろ!?! まさか、あれがスレイブだったとでもいうのかよ!?!」

「まあ、あれだけを見たらそうだよな。そして、俺が言いたいことはちゃんと察したか」

「そうじゃなくて……」

「スレイブ、ほれ」

カズキは俺の言う事に耳をかさず、スレイブの手をとって……次の瞬間、スレイブの姿がほどけて、カズキの手に両手剣が現れた。

「……………マジ、なんだな」

「オウ、大マジだ」

「……………帝具って、すげえ……………」

もう、それしか言えない。何で人の姿をしているのに剣になれるのかとか、食事とかも普通にとつてたから人間と変わらないのかなとか、そんなことも思い浮かんだんだけど、そんなのよりもあの発言が口をついて出た。

「さて、じゃあ帝具つながりで……………イエーガーズについて話してくれるか？」

「ああ、いいけど……………ボスから聞いてるんじゃないのか？」

「忙しかったことと俺が面倒だったこともあって、まだ聞いてない」

「何でそう誇らしげに……………」

なんだろう、俺カズキのキャラがつかめない……………

これまでに会った人たちとは違う、どう表現したらいいのか……………問題児？

「えっと、この間カズキがスタイリッシュを倒したから残りは七人だな。誰について聞きたい？」

「あーっと……………死者行軍・八房を使うクロメと煉獄招致・ルビカンテを使うボルス、魔

神顕現・デモンズエキスのエスデスは知ってるから、残りの四人について」

「だったら、まずは・・・」

「スタイリツシユの繋がりで、魔獣変化・ヘカトンケイルを使うセリユー・ユビキタスってやつからかな」

「ヘカトンケイル・・・生物型の帝具だったか?」

「ああ。つつても、そっちについては実際に戦ったマインに聞いた方がいいと思う」

その時に、シエーレが・・・

いや、今はそれを考える時じゃないな。

「じゃあ、そいつについて他に情報はあるか?」

「ああ、そうだな・・・そう言えば、新しい武器を使ってたよ。スタイリツシユが作った『十王の裁き』っていう武器を使ってたな。俺が見たのは閻魔槍っていうドリルと、泰山砲っていう大砲の二つだけど・・・」

「・・・厄介だな・・・」

カズキはそう言いって顎に手を当てる。

「何がそこまで厄介なんだ?」

「いや・・・スタイリツシユの使ってた神ノ御手・パーフェクターが戦闘に立てるとしたら、その力で作ったものを使うしかないんだよ。前の時の強化兵に毒、危険種になる薬

なんかだな。だから・・・これは俺の考えすぎかもしれないが、そいつを相手にするのは帝具使い二人を相手にするようなもんだ、と思った」

・・・確かに、そうとも考えられるな。

さらつとそこに考えが及ぶ当たり、俺よりこういう世界に慣れてるんだな、カズキは。「まあ、そいつについての対応はまた追々考えるところ。ヘカトンケイルがどんな戦い方してくるのかが分からないと何の対策もたてられないし」

「戦う事になったら、マスターと私の二人がかりでしょうね。それで二対二です」

「まあ、同じ生物型を使う以上はそうなるよな、たぶん」

「あ、スレイブも戦えるんだ」

「ええ。今度模擬戦でもしてみますか？」

特訓はしておきたいので是非にと返し、話を戻す。

「じゃあ、次はだれにするかな・・・翼の帝具、万里飛翔・アステイマを使うランにするか」

「攻撃方法は？」

「俺が見た限りでは、羽を飛ばしてたな。相手の頭を貫いてた」

あれはもう、銃弾と変わらないと思う。一度に大量に撃てる分、銃よりも厄介かもしれない。

「ふうん・・・情報が少なくても判断できんな」

「避け続けるか全て切り落とすか・・・同化してそんなものは効かないようにする、という手もありますね」

「まあ、あの状態になれば傷とかすぐに塞がるし、いいかもしれないな」

ん？同化？

それも帝具の力なのかな・・・

「?・・・ああ、そうか。お前は同化について知らないんだつたな」

「まあ、カズキの帝具についてはさっき言った分しか知らないし・・・」

「じゃあ教えてやるが、要するに奥の手だ」

「マスターが私と同化し、一時的に帝具人間の力を得る、というものだ」

「な、なんて無茶苦茶な・・・」

いや、確かに大抵の帝具は無茶苦茶だし奥の手はそれ以上だったりするけど、それにしたって帝具と一体化するって・・・

「ちなみに、俺の奥の手はそれだけではない」

「しかも複数個あるのか・・・」

「おそらく呪いゆえに多くの力を持つのだろうが、詳しいことは私も知らない」

自分のことなのに知らないのか・・・それでいいのか？スレイブは。

「後は、ウエイブが俺と同じ鎧型の帝具を使う……んだと思う」

「曖昧だな……で、他には？」

「……インクルシオみたいに力を引き上げる効果はあると思うんだけど、知ってることはほとんどないんだ……」

「あー……まずは情報を集めないと、か。インクルシオと村雨、パンプキンのことは相手にある程度知られてるだろうし、情報の有無もこれから先に響きそうだな」

確かに、対策ができていくかどうかは大きいだろうな。逆に対策を取られているとこつちは戦いづらいだろうし。

さて、後一人についても話さないといけないんだよな……どうしようか……

「で、後一人は？」

「……アイツ……ヘインは一回も帝具使っていないんだよな……」

「情報なし、か……どんな帝具か、くらいは分からないか？」

「……たぶん、腰にとめてた剣だとは思う。刀身は細めだけど長さがあつたから、両手剣のジャンルのはず。黒い刀身だった」

あれ、抜いてはいたんだけど帝具の力は使ってなかったんだよな……普通に剣として使ってたし。

「じゃあ、そいつについての情報はるか？」

「いや、特には・・・身長が俺より低めだったり、エスデスに対しても『くっす』っていう口調を使ったりだとかはあるんだけど・・・」

「その身長で両手剣を使うのか、なんだかアンバランスだな・・・」

「刀身が細めな分、まだマシかもしれないですよ？」

確かに、その分もあってかそこまで違和感を感じなかった。使い慣れてる、って感じがあつたのもその要因だと思う。

何だか・・・不思議なやつだったなあ・・・

|||||

「ん？かき氷か、ヘイン」

「あ、エスデス隊長・・・どうもっす」

宮殿の庭でかき氷を食べていたら、エスデス隊長に声をかけられたっす。何かまずかったんっすかね？

「えっと・・・何かいけなかつたりするっすか？」

「いや、構わないさ。ただ、私に言ってくれば上質な氷を準備してやったんだがな」

「いやいや、さすがにそんなことで上司の手を煩わせるわけにはいかないっすよ。それ

に・・・自分も氷は作れるっすし。あ・・・でも、」

とはいえ、エスデス隊長の方が圧倒的に上質な氷を作れるのも事実なんっすよね。

「今度、一度でいいんでエスデス隊長の作った氷でかき氷を食べてみたいっすね」

「今の様にある程度自由な時間ならいつでもいいぞ。私の分も作ってもらうがな」

「もちろんっすよ。と言つても、ただこいつを回すだけなんっすけど」

そう言いながら自分の横に置いてあるものを叩くっす。割と多くの家で見られるかき氷機、疲れることを除けばいいもんっす。

「あ、ヘインズルイ。私もかき氷ほしい」

「お、俺もいいか？」

と、そんな風にのんきな話をしていたらウエイブとクロメがきました。うくん、クロメは大もりになると思うっすから、これじゃ足りないっすね。

「あ、なら私もいいですか？ 久しぶりに食べたいですし」

「皆が食べるなら、私もいいかな？ 何なら私がやるから」

と、そこでランさんとボルスさんも来たっす。

うくん、この流れだと・・・

「あ、私もいいですかー!? コロも食べる？」

「キューイ！」



うん、やつぱり来たつすね。これでイエーガーズ全員集合つす。まず間違ひなく氷が足りなくなつたつすねえ。

「エスデス隊長、さっきの今で悪いんつすけど、さつそく氷を作つてもらつてもいいつすか？この人数じゃどう考えても足りないつすから」

「そうだな。．．．ほれ」

と、エスデス隊長が本当に大量に．．．というか巨大な塊で出してきたそれを帝具を抜いて切り分け、シートの上に置いた中から一つの塊を取り出して削りに掛け始める。あ、そういえば．．．

「君はどうするつすか、レイン？」

『んー．．．食べるのもだるいんで、パスでー』

「了解つす」

他の人には聞こえていないであろう声量で会話をして、いらぬことを確認。さて、それなら八人分を作ればいいつすね。

あ、クロメのはその何倍も準備しないと．．．頑張るつす。

## 第六話

「うーん、これは・・・まーた気持ち悪い見た目つすねえ・・・」

「なまじ人間に近い分、余計にね」

お、ボルスさんとは意見があつたみたいつすね。ウェイブ君も切りながら顔をしかめてるみたいつすから、同意見と考えていいはずつす。ただ・・・

「お二人ともダメですよ、そんな調子じゃ！コイツ等は悪なんですから、見た目は気持ち悪くて当然です！」

セリューさんとは、どうしても意見が一致しそうにないつす。彼女の性格からして仕方なくはあるんすけど、どこか人間らしくないというんすか・・・

「レインは、どう思うつすか？」

『燃やしたーい。それが叶わないなら使わないでー、だるいからー』

「はいはい、分かつたつすよ。次はちゃんと燃やすつすから、そのまま起きててください  
いっす」

『絶対よー』

せめてもう少し声量を大きくしてくれればいいんすけどねえ・・・今のところ自分以

外と話そうともしないから、紹介も出来ないっす。

「あ、あの群れ、このままだと道に出ちやう！急がないと！」

「あ、ちよ、ボルスさん!？」

「そんなに急がないでください！」

と、そんなことを考えてたら置いてかれたっす。ボルスさん、何であんなに重そうなもの背負ってるのに走るのはいんすかねえ．．．やっぱり、鍛え方が違うんっすか？  
「と、そんなことを言ってる場合でもなさそうっすね。レイン、敵の数は分かるっすか？」

『んー、五体くらいじゃない？さ、派手に派手に！』

「普段ローテンションなのに、こういう時だけはテンション高いっすよねえ．．．まあ、誰にも見られてないからでしょうけど」

そんな会話をしているうちにも目の前から最近出沒し始めた危険種が五体ほど。やっぱり、何度見ても人間みたいっすね。見た目はどうであれ危険なのは間違いないっすから、すぐに片付けるっすけど。

「森に火をつけないことだけ、注意してくださいっす」

『分かってる分かっている！それより早くしてよ！これ以上お預けなんて、私おかしくなっちゃうから！』

「妙な言い回しは避けてほしいところっす、ねー!」

と、そのタイミングでちようど向かってきた危険種に帝具を突き刺して、そのまま帝具の力を解放。火をつけるっす。

内側から黒い炎で燃やされてる危険種は苦しそうにしてるっすけど、まあそんなに時間もかからずに燃え尽きるはずっすからこのまま放置。すぐに剣を抜いて次に飛びかかってきた二体を横薙ぎに切り払い、同様に燃やすっす。

帝具の能力でもあるこの炎はレインの意思で燃え移らないようにしてもらって、残り  
の二体に……

『あーっ!ヘイン、逃げちやう逃げちやう!早く追って!』

「そう言われても、向こうの走る速さなかなか何すよ?」

『それでも追い付いて!あれ全部燃やしてくれないなら、一週間口きかないから!』

「どうせ話しかけても、だるいって言って対応してくれないじゃないっすか……」

そうはいっても、この発言には戦闘も手伝わらないという意味も込められてるっすから、追わない訳にはいかないんすよねえ。とはいえ、追いつけそうにもないので……氷を飛ばして、その背中当ててみるっす。

お、こつちを振り向いた。ちようど二体の距離もそこまで開いてないっすし……

「ちよつと雑になるっすよ、レイン!」

『へ？ああ、そういう・・・OKOK！やっちゃって！』

本人の了解も得られたところでレインの柄を逆手に握って、勢いよく投げます。

危険種までの間に刀身は黒い炎で包まれ、その背にあたり・・・よく燃えてるつすね。途中でもう一体にも触れてしまったのか両方が燃えだしたので、これでオツケーなはずです。

「満足つすか、レイン？」

『もう大満足！なんだかこいつら人間に似てるし、気持ちよかったー！』

「それは何よりつすね。自分も危険種で済ませることが出来て、ちよつと助かったつすよ。レインの痲癩はいざという時に困るつすし」

『ねえねえ、これからもコイツ等が出てくる間は狩ろうよ！それも仕事のウチなんでしょ！』

「確かに、それも仕事に含まれるつすねえ・・・いいつすよ。たまには、レインに付き合うつすから、いざという時は全力でお願いつす」

『もちもち！で、それじゃあ・・・だるいから寝てまーす。何かあつたら起こして〜』  
相変わらず、切り替えが早いつすねえ・・・

「カカカ！」

「あ・・・まづつた、つすか？」

と、そこで急に飛び出してきた危険種に対して氷の弾丸を撃つちやっかつす。誰かに見られたりは・・・してないっすね。

とりあえず、良かったっす。あんまり知られたくはないっすから、これ。

|||||

「ウェイブ君、クロメちゃん、ヘイン君。お茶が入ったよ」

「い、いつもすいません」

「ありがとう」

「いいのいいの。好きでやってるんだから♪」

ウェイブとクロメのチェスを見ていたら、ボルスさんがお茶を入れてきてくれたっす。始めてこの人が結婚してるって聞いた時は心底驚いたっすけど、今では納得っすね。これだけ気を配れて優しい人なら、そこに気付いてくれる人もいるはずっすよ。

「ヘイン君はどう？チェスのルール、分かっちゃった？」

「まだちよつと怪しいっすね。コマの動きはぎっくり覚えたんすけど・・・」

「じゃあ、私とやってみようか。分からないところはやりながら教えてあげるから」

「申し訳ないっすけど、お願いするっす」

いやホント、ボルスさんいい人つす。本人に言ったら否定されるのが目に見えてるつすけど。

「……………」

と、そんなことを考えてたらウェイブがなんか考えてるつすね。どうしたんでしようか？

「どうしたの、ウェイブ君」

「俺……何だか悔しいです。ボルスさんいい人なのに、さっきの商人みたいに皆……外見で判断して……」

いや、確かに今も拷問官みたいにマスク着用した上に上半身裸、その胸にも三本の傷跡が刻まれて……って感じつすから分かるんすけど。

「……………人のこと言えるの？」

「初対面の時とか、二番目に集合場所についたのに対角線に座ってたつすよね？」  
「うっ……………！そうだった！」

ちなみに、一番はボルスさんつす。向かう途中でウェイブを見かけたことと三番目についたのが自分なことからも、これは間違いないつす。

そんなことを考えているとボルスさんは各々の前にお茶を置いてくれたつす。熱々のお茶って美味しいつすよね……

『ヘインってホント、たまに老人っぽくなるよね』

「・・・珍しく起きてるみたいっすし、今日こそ挨拶しないっすか？」

『ん〜、パスで〜』

「悪い人ではないっすよ？」

少なくとも、心底アウトってほどの人はいないっす。そりやエスデス隊長とかセリューとかクロメとかどこか狂ってる人もいるっすけど。

『それはそうなんだけど、もうちよつと待って〜。じゃないと、燃やしちゃうかもだから』

「・・・そう、っすか。それじゃあ、仕方ないっすねえ」

ふと、レインを・・・この帝具と出会った時のことを思い出したっす。

とある神殿の奥深くに封印された両手剣。それに触れたものがごとく黒炎に包まれて骨も残さずに燃え尽きた。そんな噂が流れ、それは帝具なのではないかということとで帝国軍のとある部隊が回収に向かうことになり、自分の所属していた部隊がそれらに選ばれたんすけど・・・生きて帰ったのは、自分だけ。

噂の通りレインに触れた人はみんな黒い炎に包まれて灰になっていき、それでも持ち帰れという命令であつた以上持ち帰らない訳にはいかないと、隊長の命令で次々と隊員がその柄を掴んでは燃えて行き、最後にはその隊長も燃えたっす。



元々その燃える現象も適合者でないからという推測だったつすから、一応帝具使いに分類されていた当時の自分は、隊長に掴むよう命令されることはなかった。まあでも、さすがに最後の一人になってしまった以上、そして『事実であつたなら持ち帰れ』と命令されていた以上は「みんな燃えちやつたんで帰つてきました」なんて言つたら厳罰との間違いなし何で、とりあえず頑張つて全体的に凍らせてみたんすけど・・・見事に燃やしつくされちやつたんすよね。直接触れなければ大丈夫かと思つたんすけど、そうでもなかつたみたいす。

で、仕方なしに掴んでみたら・・・

『ん、いいね、つて言つたんだっけ？』

「そうだったつすね。まさか自分の仲間燃やしまくられたやつに気に入られるとは思わなかつたつすよ」

当時から自分は帝具使いだったはずなんすけど、どうしてかレインの適合者としても問題なかつたみたいで、しかもそのまま使えるようになるとは、思つてなかつたんすよね。まあ気に入られたなら、つてことで何で燃やしたのかを聞いてみたんすけど、

『適合者以外はいらぬから、燃やしてた。今ではヘインを除いても二人間違いなく大丈夫な人がいるけど、あの人たちは触れた瞬間、反射的に燃やしちやいそうだから。もうちよつと待つて〜』

「いいっすよ。時間をかけたおかげで大分あの考えも変わってきたっぼいいっすけど、まだ無理なら強制はしないっす。知られた時は、ほんの少しの会話でいいんでしてくださいっすよ?」

『それは約束するよ。私が両手剣型だって思われてる間は、このままだけど』

もうそれでもいいっす、と心の中で返しながら顔をあげたら、なんか美人さんがボルスさんの隣に、小さい女の子がボルスさんの腕の中にいたっす。

……え?これどういう状況っすか?

「だから私は辛いことがあっても、家族がいれば全然平気」

ああ、家族。ならあの人たちは奥さんと娘さんってことなんすね。

ホントに、ものすごい美人さんじゃないっすか。どんだけすごいんすか、ボルスさんって……

……自分も、彼女欲しいっす。

『フアイト。候補は意外と身近にいるかもよ?』

そうだと、いいんすけどねえ……